

マードックの老い

塩 田 勉

1 キケロ・玄白・川柳子

キケロの『老年論』曰く。年を取ると仕事がなく無為に過ごさねばならない、体力は落ちる、セックスもできない、死期も近づく、そう世間は言う。だが、老人は船の舵手のように静かな役割を務め、体力も期待されず、セックスも縁がなくなれば若い時のように肉欲に惑わされることなく、本来の自分に還って生きられるようになる。死が近づくというが、いつまでも生きようとせず、しかるべきときに消えてゆくことこそ望ましい。終わりだと思えば、勇気ある諫言も辞さなくなれる。「老人だからできるのだ」、とソロンが言ったように。

杉田玄白『ぼうてつどくこ 耄耋独語—老いぼれの独りごと』は語る。「自分が自分の思いどおりにならなくなる」。「同じ話をなんどもしては人に笑われ、親しい友人の名前や、朝に夕に使っている召使の名前まで呼びちがえるようになって……日用品のたぐいも……忘れては困るとしまいこんではその場所を忘れてしまう、……いま手に持っているものを忘れて探しまわることもある。……そんなふうになっていながら、役にもたたない古いことはおぼえていて忘れない」(日本の名著、『杉田玄白』)。

シルバー川柳は詠う。「耳遠くオレオレ詐欺も困り果て」(岩間康之)、「いたわりも耳が遠くてどなりごえ」(浅羽きみゑ)、「なぜ消える眼鏡と鍵のミステリー」(涌井悦子)、「暑いのでリモコン入れるとテレビつく」(佐々木郁子)、「ハイタッチ腕が上がらず老タッチ」(春十八番)、「脳のシワ顔に出ると孫が褒め」(楠畑正史)、「その昔恐竜見たかと問う曾孫」(岡崎万紀子)。避けられぬ老い。だがマードックのそれは、キケロも玄白も川柳も描かぬ老いだった。

2 記憶の消滅

1996年、アイリスが76歳のとき、広範な認知能

力を喪失しつつあると診断された。コンピュータを使用して、彼女の作品の単回出現語彙と語彙頻度を調べたところ、単回出現語彙がもっとも少なかったのは、『ジャクソンのジレンマ』、最も多かったのは『海よ、海』であった。最終作品の語彙は最も月並みで、最盛時の『海よ、海』の語彙は最も際立っていた (*Telegraph*, 1 Dec 2004)。「アルツハイマーは、忍びよる霧のように、周囲のものすべてが消え去るまで、ほとんど気付くことのない病気だ」(Bayley, *Elegy for Iris*, p.218)、と云う。だからアルツハイマーを本人は描くことができなかった。アイリスの豊かすぎる語彙も痛ましく萎んでいった。

アイリスは、洗面も着替えも忘れ、時間が分からなくなり、見慣れぬものを恐がり、ネズミのような泣き声を立て、同じ質問を執拗に繰り返す、コカ・コーラの空き缶やら、スパナーやら、片方しかない靴を拾い集めて (Bayley, p.268)、家をゴミ屋敷にし、止めどなく散歩や旅に出たがった。

ジョンとアイリスは、例えばクリスマスには、判で捺したように、鮭とソーセージとスクランブルド・エッグを、ブルガリアの赤ワインで楽しんだ (Bayley, p.274)。そういうルーチンが記憶の代替物になる。ルーチンをこなしている間は、「どこに居るの、何しているの、誰が来るの?」と不安から来る質問をしなくなる (Bayley, p.271)。

リア王やオイディプス、ゴリオ爺さんのように頑迷になる老いとは異質な老いがアイリスを見舞った。死は「覚えずして来たる。沖の干潟ひがたはる遙かなれども、磯より潮の満つるがごとし」と兼行が言ったように、アルツハイマーは気配もなく記憶を抹殺してゆく病だった。類い希な構築力も華麗な語彙力も忘却の淵に沈められていった。彼女は、消えていく記憶の地平線の手前に辛うじて『ジャクソンのジレンマ』を残すことができたけれども、読者にとっては、さながら手塚治虫の

絶筆『ネオ・ファウスト』のように、希代のナラティヴ・パワーが突然脱力し、細部を組み上げるはずのボルトが抜け落ちて野ざらしになったよう

な作品を目の当たりにしなければならない辛い巡り合わせとなった。